和田正脩

―「倜儻不羈」・「孤高の人」―

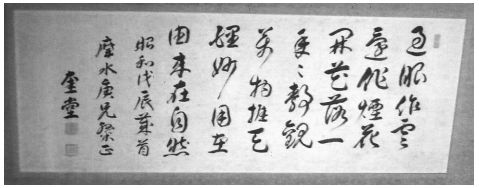
西田 毅
（大学名誉教授）

● 和田正脩とは

和田正脩（1858―1934）は熊本八代出身の「熊本バンド」の一員である。彼の生涯の親友であった徳富蘇峰の語るところによれば、「大いなる志を持ちながらそれを果たす事の出来なかった者」、「然も天を咎めず人を恨まず、終始を全うしたるは、所謂従容自得の道において自ら得たるものがあったもの」と述べている。そして、このような自ら居るところ高く、ある意味で他者との妥協性に欠ける性向は、福沢諭吉がいうところの「独立自尊」を実践した事例といえるのではないか、と敷衍している。その生活スタイルは、あくまでも自らの信念に忠実で、超然孤高の生涯を貫いたといえよう。

● 正脩の生涯と家系

伊東市にお住まいの親族をお訪ねしたのは、2008年11月はじめのことであった。ご令孫和田正徳氏（故人）の奥様にお会いして、和田正脩が所有する美術品のコレクションや漢詩の筆跡、写真、そして生前親しく付き合っていた清浦奎吾から送られた書の表装などを見せていただいた。これまで、「熊本バンド」のメンバーのなかで和田正脩は詳しい経歴がわからない人物なので、今必要なことはできるだけ正確な事実を捜して分かる部分を点畷しながら、全体像を明らかにする手法をとらざるを得ないのであるが、とにかく、今回わかった史料の紹介からはじめたい。



清浦奎吾の漢詩　和田正脩にあてたもの

まず、八代にある和田家の菩提寺の臨済宗春光寺に彫られた先の蘇峰の墓碑銘を全文紹介しよう。

和田正脩

碑文　和田正脩君摩水ト号ス。楠木氏支流タリ。肥後八代松井氏に属ス。安政五年八月十三日生ル。幼ニシテ立志凡ナラズ。明治十年ノ乱薩軍ヲ郷党ノ士ト共ニ球磨川に拒グ。熊本洋学校ヲ経テ京都同志社に学ブ。業成リテ北陸ニ遊ビ、東京ニ赴キ井上梧陰君ニ知ラレ、官命ニ依リテ白耳義ニ留学ス。帰朝志ヲ官界ニ得ズ、民間政客ト交リ時務ニ周旋ス。時ニ操觚者トナリ、更ニ実業界ニ及ブ。終身落々合スル所鮮シ。但、出入苟モセズ、衣食自足リ読書独り楽シム。交遊多カラザルモ概ネ一代ノ名士タリ。君眼ニ稜角アリ。風采整秀弁説暢朗一見常人タラザルヲ知ル。君眼中人無シ、曰ク、予百歳ノ后墓碑ニ誌ス可キ者蘇峰君アルノミト。昭和九稔二月二十三日逝く　享年七十七。　昭和九年九月初九　蘇峰菅原正敬　撰並書（ルビ、句読点は筆者）

以上が碑文の全文である。簡にして要を得た文章である。文中、和田氏の家系は楠木の一党である和田氏の後裔とみているが、その点について直に本人から確認を取らなかったと述べている。今回の調査で大正14年に和田自身の手で記された家系記録が見つかったので、参考までにここに掲載しておく。和田自筆の文章が皆無に等しい状況を鑑み、あえて原文のまま紹介する。

和田氏中興之祖為五兵衛信忠、其父平左衛門尉正信者足利義輝将軍麾下之士也、永禄八年義輝被弑也同時討死云、信忠松井康之之客分也、征韓之役、文禄二年六月二十九日戦死于晋州、長男日伊兵衛正房、参加于大坂陣、寛永年間没、長男日正虎、嶋原之乱有二番槍之功名、帰陣後早世、於是一時家名亡焉、其弟有、冒山田氏者其孫為佐田氏養子後復姓和田、而及正明遂血統絶鳶、以上墓地不詳、継和田家名者為信顕、志水氏之出也、而出白川氏為其養子者實吾正系之祖也、曰新十郎信安号道夢、明治二十年十一月十六日没、妻片山氏名寿惠万延元年三月没、長男日新兵衛正利、明治二十七年三月六日没、妻入江氏名梅枝明治三十五年一月四日没、次男日定彦正意明治三十七年十月二十一日没、従来和田氏墳墓在于八代浄信寺、依先考之遺命更卜宮地古麓之地新築塋域、明治歳次壬子三月丙戌族葬于此今茲誌右顛末以記念永年
大正十四年十月二日正脩謹誌（読点筆者）

いずれにせよ、和田家の先祖は室町幕府十三代将軍足利義輝直属の武士につながる由緒正しい家系である。和田正脩は1871年に熊本洋学校第二期生として入学、L. L. ジェーンズの感化をうけて1876年（明治9）1月、他の盟約者と一緒にかの花岡山山頂で「奉教趣意書」に署名した一人である。明治9年の秋に同志社に転入、そして1879年（明治12）6月、同志社英学校余科第一回生として卒業する（卒業演説の題目は「法律と道徳の区別」）。彼は同時に卒業した15

晩年の熊本バンド（右から3人目）

名の「熊本バンド」出身者の一人であった。卒業あるいは中退した他の「熊本バンド」出身者の多くがキリスト教の伝道や同志社教員、あるいは総長（社長）として牧界や教育界で活躍するが、和田はそうした世界に進まず、民権派私塾や東京専門学校の教師、外交官、新聞記者そして実業界に進んだ。晩年は横浜の豪商茂木（惣兵衛）商会の顧問として実業界で活躍した。

和田の略歴を見て感ずるのは「碑文」にある「終身落々合スル所鮮シ」という蘇峰の感懐である。若くして同郷の井上毅に見出されてベルギーに官費で留学をし、帰朝後は外務省に身を置きながら、時の外相陸奥宗光と政見を異にして官職を辞任、その後は大隈重信ら民間の政客と交わって衆議院議員選挙に打って出たこと、そして落選するや一時、東京専門学校で鳩山和夫の後任として国際公法の講師を勤めたり、親交のあった尾崎行雄から「報知新聞」（郵便報知新聞）の主筆を譲られる（長女和田菊の証言）など、広く政・官・言論・実業界の各方面にわたる関心と力量を髣髴させる。

●「政治青年」正脩

和田は磊落でこだわりのない反面、自ら信ずるところはなはだ篤く「倜儻不羈」な性格の持ち主であった。そうした和田の本来の志は、ほかの熊本洋学校の生徒と同じく、サムライ精神と国家主義的な性向の強い「政治青年」であったと見るべきであろう。彼は同志社の学業を終えた時点でキリスト教伝道の道を歩むことはキッパリと断念しているし、上京後は井上（毅）の門下生として官途につき、大江義塾時代の蘇峰と一緒に若き西園寺公望を訪ねたり、政論記者の陸羯南を訪問して政治上の識見を磨いた。大隈重信と知り合ったのもこの頃のことであろうか。いつ外務省に辞表を提出したのか、その時期は現在のところ確認できないが、伊藤（博文）、井上（馨）両首相と陸奥外相時代ということになれば、日清戦争開戦前の頃かもしれない。ここで思い起こされるのは「熊本バンド」出身の外交官吉田作弥（1859―1929）のことである。和田と一歳違いの吉田は同志社英学校卒業後、やはり同郷の井上（毅）を頼って外務省に入り、1885年4月、外務省御用掛（外務書記生）として、オーストリア公使に赴任する西園寺公望とともに渡欧、ウイーンを拠点にハーグ、レニングラードなどで活躍した。のち第三高等学校で国際法を担当し、同志社政法学校講師にも就任したが、1898年外務省に復職、最後は第一次西園寺内閣の時にシャム（タイ）公使で終わった経歴の持ち主である。吉田は和田と同じく同志社英学校余科第一回卒業で、外務省入省や欧州留学（吉田はボン大学、和田はベルギーの大学）もほぼ同期の二人の切磋琢磨の状況を検討しながら、和田の外務省辞任の実相を明らかにする手掛りがつかめるかもしれない。参考までに吉田の事例を引証しておきたい。

さて、和田と政界の関わりであるが、ここでは、明治27年3月の衆議院選挙戦出馬について触れておきたい。第三回衆議院総選挙は1894年（明治27）3月1日に行なわれた。

和田は大隈重信の推薦で熊本県第6区天草郡から立候補したが、対立候補の小崎義明に敗れた。「九州日日新聞」は大隈と和田の関係にふれて、和田が改進党系の政客であると報じている。しかも和田は生地八代ではなく、天草郡宮地岳村の中西新作という人物と養子縁組して同地から立候補する予定であったのが、急に同村の山本丑松の養子に変更するなど、不可解な行為におよんだため、八代町と宮地岳村両役場の間で受理訂正の問題をめぐってトラブルが発生、和田に対して氏名詐称、公文書変造共謀の訴えがなされたという。その結果、「風来候補者」としての和田が落選の憂き目を見ただけでなく、法律違反の罪に問われることになったと報じている。「九州日日」は佐々友房の流れを引く対外硬派、熊本国権派の新聞で、その記事は民党各派（自由・改進両党）に対する対抗意識から来る偏見が見られる。

たとえば、和田に関する記事を紹介すれば、「風来候補和田正脩なる者、大隈泊の展書と裾分け金千五百円を撒き散らし、頻りに陰謀狡知をめぐらして運動せし甲斐もなく、昨日着の報知に拠れば（中略）二十余点は全く国民派の勝利に帰したりと。さらぬだに、和田は別項記する如く送籍前登記をなし、氏名を詐称したる廉にて国民派より告発されんとす。泣き面に蜂とは是之を云うか」（『九州日日新聞』）といった類の記事がそれである。そこには、熊本地方における長年にわたって繰り広げられてきた吏党対民党の政治的対立に加えて、大詰めを迎えた条約改正交渉をめぐる民党内部の自由・改進両派のドロドロした抗争が映しだされている。和田が蘇峰のように熊本地方の民権運動に関わりをもったという話は聞かないが、板垣と並ぶ民党の領袖大隈といつどのような経緯で知り合ったのか、大いに我々の関心をひく問題である。

●英学教師として

先に引用した蘇峰の「碑文」に「京都同志社ニ学ブ。業成リテ北陸ニ遊ビ」という件がある。いつの時点をさしているのか正確にはわからないが、筆者は、最近、和田が富山の英学塾である越中義塾の講師をしていることを知った。越中義塾は1881年（明治14）11月に開校、明治17年6月まで続いた正則中学で、校則によると「洋漢両学」を教授する学校であった。授業は英語を用いて普通学科を教え、漢学も必須科目とされている。修業年限は4年間、正科卒業後はさらに余科の修学も認められた。「越中義塾規則」は、校則六ヵ条、教則十一ヵ条、塾則十一ヵ条、入校退校規則三ヵ条、保証状の雛形から成っており、地方の高等教育機関創設の意気込みが十分感じ取れる。学科目表を見ると、英語教則本としてウエブスターの綴書、ウイルソンの読本、英語演説と作文演説、政治・歴史・文明史はミル、ギゾー、グリーン、スウインドン、法律学はウルシー、漢籍・日

和田正脩（わだ・まさなが）　1858.8.13 ～1934.2.23

八代で生れる。楠木氏の支流の家系、八代松井氏に属する。1871年、熊本洋学校入学。1877年、西南戦争で薩摩の軍を郷党の士とともに球磨川に防ぐ。1879年、同志社英学校卒業。その後、上京して井上毅の知遇を得、官吏となり欧州に留学し、帰国後、外務省に出仕。しかし、陸奥と意見が合わず辞めて新聞記者になり、また、熊本天草から衆議院議員選挙に出馬するが落選し、ついに横浜の実業家の顧問になる。1931年、朝鮮、旧満州から中国本土を漫遊旅行し、多数の書籍や書画類を購入。1934年、死去。享年77歳。

本古典は史記、八大家読本、左伝、経書、日本外史、文章規範など、理数科には幾何代数学（デビス）、化学（ロスコノ）地質学（デイナ）、天文学（星学ロックヤル）など、実際どの程度まで実施されたか不明であるが、リベラルアーツ風の高い水準の教育が意図されていたことが分かる。和田は主に英語・英学を担当していたようであるが、1883年（明治16）には上京しているので、長くは勤務していない。

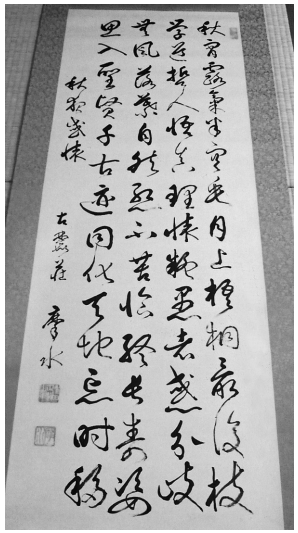
ただ、この越中義塾は民権派私塾、とくに越中義塾の一部教員が越中改進党を結成していたという指摘もあり、和田がどこまでそうした政治運動にコミットしていたかという点はともかくとして、この時点で和田と大隈・改進党グループとの何らかの接点の形成を想像できるのではないか。ほかに義塾には慶応義塾に学んだ教員もおり、そこから「明治14年の政変」前後の中央政界における福澤・大隈の動き、そして地方農村型の自由党に対して都市インテリ型民権派としての特徴を持つ改進党の力学が浮かび上がってくる。

晩年の照影

●隠遁文雅の晩年

政官界を辞した後の和田の公的生活をフォローする資料は皆無であるが、関東大震災後から昭和期の最晩年にかけての和田の隠遁文雅の私生活を瞥見しておきたい。

横浜の豪商茂木惣兵衛の顧問として一財産築いた和田であるが、彼はまた大変な読書家であった。一人娘の菊は和田の趣味が読書と書道であったこと、「仏書と英書に関しましては当時日本でも稀な所有者であり、漢書だけでも三千冊位はありました」と回想している。蘇峰も「非常の読書家」であったと証言している。その膨大な蔵書が大正12年の関東大震災で悉く消失（横浜市の野毛町で震災にあう）し、落胆したという。和田の語学の才能も評価されており、英語は無論、ロシア語、フランス語も堪能であった。若き日のベルギー留学をはじめ、通算して7、8年になるという欧州の生活で、若き日に熊本洋学校や同志社で学んだ語学に磨きがかかったのであろう。



和田正脩の筆跡

満州事変当時、和田は中国旅行を試み、朝鮮から中国本土を歩いて書籍や書画を求めたが、筆者は今回、和田家を訪問して、その美術品を見せていただいた。その一部を紹介したい。架蔵の品はおもに明・清朝の書画類であったが、明代の水墨画家沈周、行書楷書に絶妙な才能を発揮した董其昌、楷書家の高啟、山水、花卉をよくし、独特の気韻神采（気品を備えすぐれた風采を持つこと＝筆者注）をもつ文徵明、清代の進士で花卉画に巧みな蒋櫶、閨秀画家で清朝の宮中に多く収蔵された陳書、山水画の顧昉、詩・書・画にすぐれ三絶と称せられた惲寿平、清の高宗の第六王子で花卉の絵にすぐれた永瑢ら、いずれも和田の書画骨董の眼力が証明される名品ぞろいであった。美術品の蒐集のほかに最晩年の和田の楽しみは漢詩の鑑賞であった。自ら作詩して表装したものがあったが、一点、披露しておこう。

世昧清疎野外仙
　世に昧く清疎野外の人
獨驚壯志化雲煙
　獨り驚く壯志の雲煙と化するを
与空渭水重綸鈍
　空しく渭水に淪を垂れる鈍さと
孰若滄浪濯足賢
　滄浪に足を濯うの孰若を賢とするや
生業小成終有謂
　生業小成終に謂有り
宦遊失敗故無縁
　宦遊の失敗故に縁無し
人間運命似相定
　人間の運命は相定むるに似たり
花発花萎儘自然
　花は開き花は萎む自然の儘に

寓懐　摩水

飄々と人生を達観した晩年の精神的境涯が伝わってくる作品ではないか。ちなみに和田の戒名は古麓院数奇摩水日脩居士という。

西田　毅（にしだ・たけし）
1936年大阪府生まれ。62年同志社大学大学院法学研究科政治学専攻修了、直ちに法学部助手に就任、専任講師、助教授を経て74年から教授、77年大学院教授。法学部長、人文研所長など歴任、2007年名誉教授。オックスフォード大学、北京日本学研究センター、武漢大学、アマースト大学等の客員教授、研究員を勤める。日本政治学会、日本社会文学会理事等歴任。幕末から近代日本の政治思想を中心に日本政治思想史を専攻する。主要著作として『竹越三叉集』（三一書房1985）、『近代日本政治思想史』（編著、ナカニシヤ出版1998）、岩波文庫『新日本史』上下（岩波書店2005）、『概説日本政治思想史』（編著、ミネルヴァ書房2009）ほか。